

「サヨナラを歌う」

水瀬 真理佳

登場人物

佐野鈴香(10)(21) 大学3年生

日高大和(27) Bittt@rLemonのボーカル兼ギター

小林樹(21) 大学3年生

佐野美幸(37) 鈴香の母

佐野康太(38) 鈴香の父

千葉真(32) 鈴香の主治医

飯田達也(27) Bittt@rLemonのベース

中村純(27) Bittt@rLemonのキーボード

原健太(27) Bittt@rLemonのドラマ

佐久間美優(24) 大和の大学の後輩

林麻衣(30) 純の彼女

原健司(28) 健太の兄

原凜子(28) 健太の妻

難波孝宏(50) レコード会社のプロデューサー

医師

店員

妊婦

司会者

○鈴香のアパート・リビング（朝）

こぢんまりとしたワンルーム。

6時30分、スマホからポップな曲が流れる。

ベッドで眠る佐野鈴香（21）、画面も見ずに慣れた手つきでアラームを止める。

反対側にぐるりと体を向け、再び眠る。

× × ×
6時40分、バラード調のしっとりとした曲が流れる。

鈴香、少し目を開けてアラームを確認。

鈴香「あとちよっと……」

と、また眠る。

× × ×
6時50分、ロックな曲が流れる。

鈴香、スマホの画面に目を細め、唸りながらのそのそとベッドから出る。

鈴香、カーテンを開けて太陽の光を浴びる。

○同・キッチン（朝）

鈴香、電気ケトルに水道の水を入れて
セットする。

○同・洗面所（朝）

鈴香、ヘアバンドで前髪をかき上げる。
水を出して鏡に映った自分の顔を見つ
める。

温水になったのを確認して顔を洗い、
化粧水と乳液を顔に塗る。

歯ブラシに歯磨き粉を付ける。

○同・リビング（朝）

鈴香、歯を磨きながらウォークインク
ローゼットを開ける。

洋服を端から端まで見る。

アナウンサーの声「日中は穏やかな春の陽気
に包まれますが、朝晩は少し冷え込むので
羽織るものがあると便利でしょう」

鈴香、服を選んで着替える。

○同・キッチン（朝）

鈴香、食パンをトースターに入れる。
マグカップにココアの粉を入れて湯を
注ぐ。

チーンとトースターの音が鳴る。

鈴香、こんがり焼けたパンの端を熱そ
うにつまんでお皿に乗せる。

○同・リビング（朝）

鈴香、ローテーブルにパンとココアを
運ぶ。

鈴香「いただきます」

と、手を合わせる。

テーブルの上にはいくつもの葉袋。

鈴香、テレビを見ながら食べる。

○（回想）佐野家・鈴香の部屋（夜）

鈴香（10）、ベッドに寝て首まで布
団を被る。

顔を真っ赤にして辛そうに呼吸する。

佐野美幸（37）、鈴香の手を握る。

美幸「辛いね。早くよくな〜れ」

鈴香M「小学4年生の頃。風邪をこじらせたのか、しばらく高熱が続いたことがあった」

○（回想）病院・診察室

佐野康太（38）と美幸が不安げな表情で医師を見る。

医師「原因は分かりませんが、今鈴香ちゃん
のリンパ球は普通の人の半分しかありません。
高熱はそのせいだと思います」

美幸「リンパ球って……少ないとどうなるんですか!？」

医師「簡単に説明すると、体内に入ってきた
細菌やウイルスと戦ってくれる細胞が少な
いということです。そうすると色んな感染
症にかかりやすくなってしまいます」

美幸、さらに不安そうな顔をする。

佐野、美幸の肩を抱く。

佐野「でも先生。それならその細胞を増やせ

ばいいんですよね？ 今の時代そんな薬い
くらでもありますよね？」

医師「おっしゃる通りです。ただ、それは根
本的な解決にはなりません。大学病院の紹
介状を書くので、そこで精密検査をしても
らってください」

○（回想）大学病院・検査室

鈴香、病院着でCT検査やMRI検査
を受ける。

○（回想）同・診察室

佐野と美幸が治療方針の説明を受ける。
千葉「特別な治療はできません。とにかく些
細な風邪や怪我にも気を付けて生活してく
ださい。免疫の薬を飲みながら様子を見て
いきましよう」

千葉真（32）、両親に紙を渡す。

「レベルⅠ…通常生活可。ただしマス
ク着用が望ましい。レベルⅡ…準安静。

人混みや怪我のリスクがある行為は避ける必要あり。マスク着用必須。レベルⅢ…自宅内安静。レベルⅣ…入院治療」と書かれている。

○（回想）小学校・校庭

生徒が校庭で走り回る。

鈴香、マスクを着け、木陰で体育座りをしながら羨ましそうに眺める。

○（回想）同・教室

6人ずつ机を合わせて給食を食べている。

鈴香、給食のトレーに大量の薬。

○（回想）佐野家・鈴香の部屋（夜）

鈴香、パジャマ姿でベッドに座る。

鈴香「私もみんなとお泊り行きたい！」

と、泣きじゃくる。

美幸、隣に座り顔を歪ませながら鈴香

を抱きしめる。

美幸「ごめんね……ごめんね……」

佐野、鈴香の前にしゃがみ頭を撫でる。

○（回想）同・廊下（深夜）

鈴香、目をこすりながら、電気がついているリビングをそーっと覗く。

○（回想）同・リビング（深夜）

美幸、ソファに座り手で顔を覆う。

美幸「私のせいよね……ごめんね鈴香……」

佐野「誰のせいでもないよ。先生も言った
だろう？ ちゃんと気を付けていれば大丈夫
夫って」

佐野、美幸の隣に座り背中をさする。

○（回想）同・廊下（深夜）

鈴香、唇を噛みしめ、静かに部屋に戻る。

○（回想）同・鈴香の部屋（深夜）

鈴香、涙で濡れた頬を手で拭い、布団を被って眠る。

○鈴香のアパート・玄関（朝）

鈴香、靴を履きマスクを着けてドアを開ける。

○同・正面（朝）

小林樹（21）が待っている。

小林「おはよ！」

と、手を挙げる。

○住宅街（朝）

鈴香と小林、並んで道を歩く。

車が近づいてくる音がして、小林が自然な流れで鈴香と位置が変わる。

小林「大学入ってから入院することなくなっ

たけど、最近はわりと数字いい感じ？」

鈴香「相変わらずレベルⅡのままだけど、悪

くはなっていないってこの間先生に言われた！」

小林「そっか。鈴、たまには実家帰れよ？」

おばさん寂しがってるぞ」

鈴香「えー！ 樹まだ私のお母さんと連絡取ってるの!？」

小林「当たり前だろ!? だーれのおかげで一人暮らしできてるんだっけ？」

小林、鈴香の頭を両手でぐりぐりする。

鈴香「ごめんってー樹様のおかげですう。でもお母さん、樹が連絡してくれて嬉しいと思う。前に、『樹くんみたいな息子がほしい』って言ってたもん。だから、ありがとね」

小林、鈴香を呆れた目で見つめる。

鈴香、不思議そうな顔をする。

小林、大きいため息をつく。

鈴香「ちよっと！ 人の顔見てため息つくなんてひどい！」

小林「ああ、俺ってホントにいい奴すぎ。間

違いなくスタンディングオベーションもの
だよこれ」

鈴香、変なものを見るような目で小林
を見る。

○大学・正門（朝）

小林「じゃあまた連絡する」

鈴香「うん。あとでね」

互いに手を振ってそれぞれ逆方向へ行
く。

○同・講義室（朝）

階段教室で、学生がまばらに座って談
笑している。

鈴香「おはよう」

と、声をかけながら定位置に座る。

周りからはインターンシップやOB訪
問の話が耳に入ってくる。

鈴香、窓の外をぼーっと眺める。
教授が入って来て授業が始まる。

鈴香M「私は夢のない人間だ。やりたい仕事も、行きたい会社もない。だって、生きていられるだけで奇跡なんだから……」

スマホに小林からメッセージがくる。

へ樹..今日大学終わってから空いてる？

鈴香、へ空いてるよ！ どうしたの？と返信。

へ樹..このライブ行かない？
バンドのチラシの写真が送られてくる。
Bitt@Lennonというバンド。

鈴香、写真を拡大する。

へ鈴香..せっかくだけど、ライブハウスは人が密集するだろうしやめておこうかな

鈴香、謝るスタンプを追加で送る。

へ樹..先輩のバンドなんだけど、客はほとんど身内でいつも3、4人くらいしかいないんだ。それなら安心だろ？

鈴香、興味がわいた顔をする。

へ鈴香…それなら…行ってみようかな！

鈴香、スマホの画面を消して授業に意識を戻す。

○ライブハウス・中（夜）

20人ほどしか入らないコンパクトなライブハウス。

客は鈴香、小林、林麻衣（30）、原健司（28）、原凜子（28）のみ。

麻衣「あれ？ そちらの子は？」

小林「俺の幼馴染で、」

小林が鈴香を紹介しようとする、バンドメンバーがステージに出てくる。ボーカルの日高大和（27）、ベースの飯田達也（27）、キーボードの中の村純（27）、ドラムの原健太（27）の4人編成。

日高「こんばんは。Bitt@r Lemonです。今日

はよろしく！」

日高、ウェーブのかかった黒髪に少し
髭が生えている。

鈴香、日高を見て息を呑む。

日高が歌い出す。

鈴香、心地よさそうに目を閉じて聞き
入る。

× × ×

日高「……ありがとうございます」

日高、ステージでお辞儀をする。

飯田「すいません。うちの大和、相変わらず

口下手で」

飯田が日高の肩に手を回しながら言う
と観客が笑う。

日高「……余計なお世話だっつーの」

と、照れ臭そうにする。

鈴香、観客と一緒にクスクス笑う。

○居酒屋・店内（夜）

小さな大衆居酒屋の座敷。

飯田、立ち上がって乾杯の音頭をとる。

飯田「今日は初めましての佐野鈴香ちゃんも来てくれました！ 今日もみなさんありがとうございます！
とうございました！ それじゃあ乾杯！」
全員「かんぱーい！」

鈴香、控えめに乾杯。

飯田「来てくれたお客さんと打ち上げすんのがビタレ流なんだ」

鈴香「そうなんですネ！」

小林（小声で）とか言って、この人たち、とにかく飲みたいだけなんだよ」

小林、鈴香に耳打ちする。

飯田「樹いゝ？ 聞こえてんぞー？」

小林、しまったという顔をする。

鈴香「樹と飯田さんはなに繋がりの？」

小林「俺、ラーメン屋でバイトしてんじやん？ 昔達也さんもうちでバイトしてたらしくて、今もたまに食べに来てくれんだ。それで仲良くなった。ちなみにあっちにいるのが中村さんの彼女の林さん、そこに座

ってるのが原さんのお兄さん夫婦で、健司さんと凜子さん」

各々、最近聴いて心に響いた曲、売れそうなバンドの話について語り合う。

鈴香、目をキラキラさせて話に耳を傾ける。

○同・店の外（夜）

小林、泥酔して飯田に抱えられる。

鈴香「樹大丈夫？ 水飲めそう？」

小林「んー？ ああ、鈴う……俺が送って行くから心配すんなあ」

飯田「お前は送られる側だっつーの！」

と、重そうに小林を抱え直す。

飯田「コイツ念のためにウチ連れて帰るわ。」

大和は鈴香ちゃんよろしくな」

日高「ん」

鈴香、慌てる。

鈴香「そんな、大丈夫です！ まだ21時ですし！ 1人で帰れます」

日高、1人で歩き始める。

鈴香、助けを求めるように飯田の方を見るが、無言で頷かれる。

鈴香、急いで日高の後を追いかける。

○繁華街（夜）

鈴香、日高の少し後ろを歩く。

日高、鈴香をチラッと見る。

日高「……普段どんな音楽聴くの？」

鈴香、驚いて日高の隣に行く。

鈴香「……ミーハーなので話題になった曲は
だいたい聴くんですけど……特に好きなのは
Ms・バーニーってバンドで……」

日高「バーニーいいよな！俺の憧れ」

日高、食い気味に言う。

鈴香「そうなんですネ！私の周りでバーニー
分かる人あまりいなくて……嬉しいで
す！」

日高「確かに珍しいかも。なにで知ったの？」

鈴香「私、入院すること多かったのでめっちゃ

めっちゃ暇で。それで色んな音楽聴きまくってたらいつの間にかって感じです」

日高「入院……？」

鈴香「……私、人より免疫が低いから病弱で、昔はよく入院してたんです。今はもう落ち着いてるんですけど」

日高「……そっか」

日高、穏やかな顔で傾聴しながら歩く。

× × ×

鈴香、お腹の音が鳴り、手で押さえる。

日高、クスツと笑う。

日高「打ち上げであんま食ってなかったもんな」

鈴香、足下を見ながら気まずそうに口を噤む。

前方にファミレスが入る。

日高「そのファミレス寄ってく？」

と、店の方を指差す。

鈴香、コクリと頷く。

○ファミレス・入口（夜）

音が鳴り店員が来る。

店員「いらっしやいませ。何名様ですか？」

日高「2人です」

店員「ご案内します」

○同・テーブル席（夜）

日高、オーダー用のタブレットを取って鈴香に渡す。

鈴香「こんな時間に食べるなんてやばいです

よね？」

日高「うん、やばいな」

鈴香、タブレットから顔を上げて日高を見つめる。

日高「誘ったのそっちじゃんって顔してるな」

日高、白い歯を見せてニヤツと笑う。

鈴香「もういいんです！ 今日自分を甘やかします！ ガッツリいきますからね！」

鈴香、ヤケクソで注文ボタンを押す。

日高「おー食っちゃえ食っちゃえ！」

× × ×

鈴香のハンバーグステーキプレートと
パン、日高のコーヒーが運ばれてくる。

日高、クスクス笑い出す。

鈴香「なんで笑うんですか!？」

日高「いや。体弱かったって言ってたし、て
つきり小食なのかと思ってたけど。ホント
にがつつりだったから」

鈴香「（恥ずかしそうに）ああ……」

日高「いーじゃん。たくさん食べれるのは健
康な証拠だよ」

鈴香、ハンバーグを切り分けてプレ
ートを日高の方にスライドさせる。

鈴香「……少し食べませんか？」

日高「じゃあもらおう」

日高、カトラリーケースからフォーク
を取り、肉の塊に突き刺して口に運ぶ。

日高「んーうまい！」

鈴香、黙々と食べ進める。

日高「学生だよな。大学楽し？」

鈴香「楽し……くはないですね。みんな就職の話ばかりで。私は夢とかないですし」

鈴香、元気がなくなる。

日高「夢をなんか大きくて立派なものだと思いきすぎじゃねーの？ 何になりたいとか、この仕事がしたいイコール夢っていう方程式はさ、つまんねーよ。いいじゃん、明日誰に会いたいとか、ファミレスでこうやって21時過ぎでも気にせずハンバーグ食いたいとか。そういうのも、夢の1つだと思っうけどな。なんかねーの？」

鈴香、うーんと考える。

鈴香「……日高さんは？」

日高「俺はとりあえず、ビタレで東京ドーム埋めたいかな。あと世界の音楽チャートで1位獲るとか」

鈴香「日高さんの夢おっきいのばかり！」

全然ハンバーグレベルじゃないじゃないですか！

日高「だーから！ 夢に大きいも小さいも

ねーって」

鈴香、不満そうな顔をする。

日高「とにかく。構えず、楽に考えればいいんだよ。これ、俺からの宿題な」

○駅・改札前（夜）

日高「じゃあ気をつけて」

鈴香「はい！ ごちそうさまでした」

日高、鈴香が見えなくなるまで見届ける。

鈴香、改札横の柵まで戻ってくる。

鈴香「日高さん！」

日高「？」

鈴香「（緊張気味に）またライブ、行ってもいいですか？」

日高「ニカッと笑う」おう！ 待ってる」

鈴香、にっこり笑い返す。

○住宅街

鈴香と小林、2人で歩く。

小林「え？ 日高さんの連絡先が知りたい？」

小林の顔にしわが寄る。

鈴香、無言で頷く。

小林「達也さんに聞けば教えてくれるとは思
うけど……でも急にどうした？ なんかあ
んの？」

鈴香「ちよつとね、夢の宿題があつて！」

鈴香、軽やかに歩き続ける。

小林、立ち止まったまま、

小林「夢？」

と、首を傾げる。

○居酒屋・店内（夜）

ビタレメンバー、麻衣、小林がテーブ
ル席に座っている。

小林「そういえば、鈴が日高さんの連絡先知
りたいらしくて。なんか夢の宿題がどうと
か意味不明なこと言ってたんですけど……」

飯田「夢の宿題？」

全員の頭にハテナマークが浮かぶ。

日高「夢……？ ああー！ そうそう宿題な。
いいよ教えて」

小林、目を丸くする。

飯田「よく分からんけど、それなら大和が樹
から鈴香ちゃんの連絡先聞けば良くね？」

飯田、枝豆に手を伸ばしながら言う。

日高「あーそうだな」

小林「……じゃあ送りますね」

と、気が進まない様子。

小林「それよりも、なんですか？ 夢の宿題
って」

日高「うーん。ちよつとな」

小林、むっとする。

○鈴香のアパート・リビング（夜）

鈴香、ソファに座ってスマホを見る。

小林からメッセージがくる。

へ樹.. 今日日高さんに鈴の番号伝えた
から〜

その瞬間、未登録の番号から着信。

鈴香、スマホを落としそうになる。
スマホを持ったまま部屋の中を行ったり来たりして、真っ暗なテレビの前で前髪を整える。

鈴香、おそろおそろ通話ボタンを押す。

日高の声「あーもしもし？ 俺だけど」

鈴香「（笑いながら）なんかひと昔前のオレオレ詐欺みたいですね」

日高の声「ひと昔前ってのは余計だよ。え？

誰か分かった？」

鈴香「分かりますよ！ だって日高さんの声、安心するいい声ですもん」

電話の向こうから咳き込む音。

鈴香「日高さん!? 大丈夫ですか!？」

日高の声「悪い、ちょっとむせた。それで、夢の宿題できたって？」

鈴香「はい！」

鈴香、咳払いをして話し始める。

鈴香「私、東京ドームとか大きい箱でバンドの生演奏を聴いてみたいんです。だから、

日高さんたちビタレが東京ドーム公演して、
音楽チャート1位になるのをこの目で見る
のが、今の私の夢です！ どうですか…
…？」

日高の声「なるほど。いいじゃん！ じゃあ
その時は特等席用意しなきゃだな」

鈴香「やったー！ 約束ですよ？」

鈴香、電話越しにはしゃぐ。

日高の声「…次のライブ、来週だけど来れ
る？」

鈴香「受診の日なので、問題なければ行きた
いです！ あ、これも夢ですよね？」

日高の声「おー分かってきたじゃん。その調
子」

一瞬の沈黙。

日高の声「悪い！ ちょっとやること思い出
したわ！」

鈴香「あっ、はい！ お忙しいのにありがと
うございました！」

日高の声「いや、今忙しくなったっつーか…

：まあいいや。次のライブ待ってるから！

おやすみ」

鈴香「おやすみなさい！」

鈴香、電話を切ってベッドに寝転ぶ。

テディベアの手を動かしながら話しかける。

鈴香『ライブ待ってる』だって〜！ 楽し

みだなあ」

○日高のマンション・ベランダ（夜）

日高、まだだいぶ残っていた煙草を灰皿に押し潰し、バタバタしながら部屋の中に入る。

○同・作業部屋（夜）

日高、パソコンを起動させ、紙と鉛筆を取り出す。

立てかけていたアコースティックギターを持ち、キャスター付きの椅子に座る。

ギターを鳴らし、ハミングしながら鉛筆を走らせる。

○同・作業部屋（朝）

窓から朝日が差し込む。

日高、椅子に座ったまま伸びをして眩しそうに窓の外を見る。

スマホを確認すると5時30分の表示。バンドのトークルームにメッセージを送る。

へ大和…次のライブでやりたい曲できただけど

スマホをデスクに置いて肩を揉みながらベッドに向かう。

後ろでスマホの通知が鳴る。

日高、スマホを見ながら、

日高「まだ聴いてもないのにいいのかよ」
フツと笑ってベッドに沈む。

○ライブハウス・中（夜）

鈴香、キョロキョロする。

観客は全部で15人ほど。

日高「今日は完成したばかりの新曲をやる
うと思います」

鈴香、歌を聴いて大きく目を見開く。

○居酒屋・店の外（夜）

打ち上げ後、店からメンバーが次々と
出てくる。

鈴香、そわそわしながら日高に駆け寄
る。

鈴香「日高さん！ あの、私の勘違いかもし
れないですけど……今日の新曲って、もし
かして、ファミレスとか電話で話した……

……？」

日高「口角を上げて」どうだろうなく？」

と、はぐらかす。

鈴香「あ！ ずるい！」

鈴香、日高が箱から取り出した煙草を
奪い取る。

鈴香「これは没収です！」

日高「コラ、返せって！ 最後の1本なんだよ吸わせろ！」

他のメンバーは2人を微笑ましく見守る。

小林、不機嫌そうに鈴香たちを見る。

小林「鈴、帰るぞ」

鈴香「あ、うん。ごめん。お疲れ様です」

鈴香、1人で行ってしまった小林を追いかける。

○住宅街（夜）

鈴香、横から小林の顔を覗き込む。

小林「なあ。鈴って日高さんのこと好きなの？」

鈴香「ええっ!? 違うよ、そんなんじゃない……」

鈴香の顔が赤くなり、小林の顔は曇る。

小林「やめとけよ。3Bって知らねーの？」

バンドマンは恋人には向かねーよ。第一、鈴なんて相手にされないに決まってんじや

ん」

小林、隣を見ると鈴香が泣きそうな顔を
をしている。

小林「……（慌てて）ごめん。ちょっと言い
過ぎた」

鈴香「（無理に明るく）そうだよね!? やだな

あ、わかってるよ！」

鈴香、精いっぱい作り笑顔。

○鈴香のアパート・リビング（夜）

鈴香、ソファで体育座り。

スマホで「バンドマン 好きになる」
と検索。

「やめた方がいい」という記事が多い。

鈴香、横にごろんと寝転んで日高との
トーク画面を開く。

へ鈴香…ごめんなさい。好きになっ
ちやいました〜と打ちこんで消す。

鈴香、枕に顔を押し付けて唸る。

○小林家・小林の部屋（夜）

小林、ベッドに仰向けになる。

小林「あー。俺カッコわる……」

目元を手の甲で隠しながら天井に向かって眩く。

スマホで鈴香とのトーク画面開く。

へ樹..さっきはごめん〜と打って消す。

小林、大きなため息をつく。

○居酒屋・店内（夜・日替わり）

小林の前に日高が座る。

日高「最近佐野来ないけど、なんか聞いてる？」

小林「あー……色々忙しいみたいです」

小林、訳ありな顔で答える。

日高「忙しい、ね……」

日高、何かを察した顔。

○鈴香のアパート・キッチン（夜）

鈴香、食器を洗う。

テーブルの上のスマホにメッセージ通知。

鈴香、メッセージを確認する。

へ大和..最近ライブ来ないけど、忙しい？ あんま調子よくねーの？

鈴香、返信せずに画面を消す。

○同・洗面所（夜）

鈴香、髪の毛を乾かしながら日高に返信する。

へ鈴香..もう日高さんに会うのが辛いです

と送り、慌てて送信を取り消す。

○同・リビング（夜）

鈴香がベッドに座ってぼーっとしていると、チャイムが鳴る。

壁の時計を見るともうすぐ22時。

鈴香の顔がこわばる。

○同・玄関（夜）

鈴香、物音を立てないようにドアまで行って、穴を覗く。

驚いてすぐにドアを開ける。

鈴香「大和さん!? どうしたんですか!？」

日高「さっきのアレ、なに？」

日高、息が上がってハアハアとしてい
る。

日高、真っすぐに鈴香を見る。

鈴香「今飲み物何か持ってきます」

鈴香、部屋の中に戻ろうとする。

日高、鈴香の手を掴んで引き止める。

日高「こっちが先！」

2人を押し込むようにドアが閉まる。

日高「あのメッセージ、取り消したやつ、見
えてたから」

鈴香、気まずい顔をする。

日高「あんなメッセージを送り逃げはズルい
ぞ。普通に傷ついたし」

鈴香、観念して説明を始める。

鈴香「ビタレの音楽は大好きなのに、日高さんを見ると苦しいんです。胸がぎゅーって切なくなってる」

日高「ごめん、俺なんかした？ 正直身に覚えがないんだけど」

鈴香「してないです。私が勝手に……」

日高「勝手に……？」

鈴香「……好きになっちゃったんです」

5秒ほど間が空く。

日高、ため息をつきながらしゃがみ込む。

鈴香、焦って言い訳を始める。

鈴香「私なんか吊り合わないのは分かってます！ でも日高さん見たら気持ち溢れちゃうから、だからもうライブには行けないなって」

日高「あーマジ焦ったー」

日高、しゃがんだまま顔を押しさえる。キリッと鈴香を見上げて、

日高「でもさ、俺たちのライブ来ないで、ど

うやって佐野の夢叶えんの？」

日高、諭すように聞く。

鈴香「それは……」

日高「俺に話してくれた佐野の夢って、その程度だった？」

鈴香「そんなことないです！ ていうか、日高さんに私の気持ちは絶対分らないです！」

日高「分かるよ。俺も同じだから」

鈴香「え……？」

日高「佐野は俺のことが好き、俺は佐野のことが好き。なんも問題なくね？」

鈴香、フリーズする。

鈴香「あれ、もしかして私、今告白されました？」

日高「……かもな」

日高、くしゃりと笑う。

鈴香「日高さん、歌詞だと素直なのに、普段は本当に口下手ですよ」

日高、立ち上がって鈴香の上から覆い

被さるように抱きしめる。

日高「悪かったなコミュ障で。もうライブ来ないとか言うなよ？」

鈴香「はい。言いません！」

鈴香、日高の背中に手を回し、しばらく抱き合う。

日高「そういえば、樹と喧嘩でもした？」

鈴香「喧嘩というか……」

日高、考え込む。

日高「あのさ。俺らのこと、俺から樹に話している？」

鈴香「は、はい。大丈夫ですけど……」

鈴香、不思議そうな顔をする。

○ライブハウス・出入口（夜）

一同が居酒屋に移動しようとしている。

日高、小林に近づく。

日高「俺、佐野と付き合うことになった。お前には報告しとく」

小林、やっぱりかと諦めた顔をする。

小林「……鈴香のこと、お願いします」

日高「……やだよ」

小林「はあっ!?」

日高「佐野を取り囲む人間が1人増えただけで、これからもお前と佐野の関係は変わらないだろ？ みんなでアイツのこと支えようぜ」

日高、「まあ彼氏の座は譲れねーけど」と言い足す。

小林「分かってますよ！」

小林、イラっとしながら安心した顔。

○居酒屋・店の外（夜）

打ち上げが終わり、解散の流れ。

小林「鈴！」

小林、鈴香に声をかける。

お互い気まずい顔。

小林「……良かったな。付き合うんだろ」

鈴香「あ、ありがとう！」

小林「でも、鈴の幼馴染は今までもこれから

も俺だけだからな！ いつでも頼れよ！」

鈴香「うん！」

鈴香と小林、右手でハイタッチ。

○駅・ホーム（夕方）

電車が駅に着き、扉が開いてすぐに鈴香が走り出す。

○同・改札前（夕方）

日高、柱に体を預けて音楽を聴きながら待っている。

鈴香「遅くなってすみません！」

鈴香、走って来る。

日高、イヤホンを仕舞いながら、

日高「俺もさつき来たところ。何食いたい？」

鈴香「日高さん行きつけのお店に行きたいです」

日高「そうになるとラーメン屋とかになるから

なあ……」

鈴香「ラーメン！ 大好きです！」

日高、鈴香が尻尾を振る子犬に見える。

日高「分かった分かった。じゃあ行きますか」

日高、鈴香の手を握る。

○繁華街（夜）

2人で手を繋いで歩く。

日高「鈴香は何ラーメン派？」

鈴香、足を止める。

日高も引っ張られて止まる。

日高「どうした？」

鈴香「（照れながら）だって今、私の名

前……」

日高「あゝ。『鈴香』な」

日高、わざと強調する。

鈴香「なんか恥ずかしい！」

日高「付き合ってただからいいだろ？ 俺の

ことも呼んでみ」

鈴香「それはムリです！」

日高「ほら。や」

鈴香「……や」

日高「ま」

鈴香「……ま」

日高「と」

鈴香「……と」

日高「やまと、大好き」

鈴香「……やまと、大好き」

鈴香、言い終わってからハツとする。

大和「（満足そうに）どう？ 呼べそうだ

ろ？」

鈴香「私には大好きって言ってくれないんで

すか？」

踏切が鳴りだして2人は足を止める。

日高「……（照れ臭そうに）分かったよ」

鈴香、ワクワクした表情。

日高、屈んで鈴香の耳元に顔を寄せる。

唇が5回動くと同時に電車が通過する。

鈴香、ハツとする。

遮断機が上がる。

鈴香「もう1回！ もう1回お願いします！」

日高「（照れながら）1回だけって言った

ろ？」

鈴香「大和さん照れてるー」

日高「照れてない」

鈴香「まあそういうことにしておきますね」

日高と鈴香、目を合わせて笑い合う。

○居酒屋・店内（夜・日替わり）

20人くらいが座敷に座る。

美優「大和さんなに飲んでるんですか？」

日高「ウーロンハイ」

美優「いいなあ！ひと口ください！」

佐久間美優（24）、首を傾けながら

日高の方に手を伸ばす。

日高「（面倒そうに）飲み放題なんだから自

分で頼めって」

美優「だって1杯は多いですもん。酔っぱら

っちゃう！でもそっか、間接キスになっ

ちやいますもんね。もう、彼女の前だから

って先輩カッコつけてるう〜」

日高、呆れ顔。

美優「あ！もしかして彼女さんもウーロンハイ？じゃあひと口もらっちゃおっかな」

美優、日高の隣の鈴香に手を伸ばす。

鈴香、困った顔。

日高「あーもう分かった。これ残り全部お前のな」

日高、自分のグラスを渡す。

美優、「ヤッター」と日高のグラスに口を付ける。

日高、タブレットでドリンクを注文。

鈴香、自分のグラスを見つめる。

○同・店の外（夜）

何人かは飯田と会計の精算をする。

美優、鈴香に近づく。

美優「もしかして回し飲みとかダメなタイプでした？気遣えなくてごめんなさい！」
鈴香「いえ……美優さんがってことじゃなくて、持病の関係でちよつと……私の方こそ

すみません」

美優「てことは、相手が先輩でもってこと？」

鈴香「……はい」

美優「え、じゃあキスとかどうしてるの？」

あつ、ごめんなさい。今の忘れて！」

鈴香、黙り込む。

○住宅街（夜）

日高と鈴香、手を繋いで歩く。

鈴香「キスもできない女なんて、後悔してま
すよね？」

日高「ん？　もしかして店でのこときにして
る？」

鈴香、地面を見つめたまま。

日高「キスってさ、なんだと思う？」

鈴香「大切な人にする……愛情表現？」

日高「だろ？　愛情表現ってキスだけじゃな
いし。俺たちは俺たちのカタチとペースで
いいじゃん。な？」

日高、鈴香の手の甲と指に唇を這わせ

る。

日高「なんかいい匂いする」

鈴香「ハンドクリームかな」

鈴香、靴からハンドクリームを取り出して日高の手に塗り込む。

日高「髭面の大男がこんないい匂いさせてダイジョウブか？ 捕まんねー？」

鈴香「笑いながら」大丈夫ですよ。これでお揃いです」

日高、目を閉じて心地よさそうに自分の手の匂いを嗅ぐ。

日高「今のでいい歌詞書けそう」

鈴香「じゃあ著作権料とろっかな」

日高「恋人割とかある？」

日高、鈴香の肩を抱き寄せてくっつきながら歩く。

○ライブハウス・控室（夜・日替わり）

ビタレのメンバーが帰る準備をする。
ノックの音が聞こえて飯田がドアを開

ける。

眼鏡をかけたビジネスルックの男が立っている。

難波「なあ。お前らうちで稼ぐ気ないか？」

難波孝宏（50）、飯田に突然名刺を渡す。

名刺には会社名と肩書きが書いてある。

飯田「これって……」

メンバーで顔を見合わせる。

難波「そ。俗に言うスカウトな。とりあえず

後でここに連絡くれ」

ガチャンとドアが閉まって難波がいなくなる。

ビタレ「よっしゃー！」

○鈴香のアパート・リビング

鈴香、ソファでネットニュースを見る。

【話題沸騰！ Bit@r Lemon CM起用でお披露目】の見出し。

鈴香、ガッツポーズをした後に咳き込

む。

自分の額に手を当てながら体温計を取りに行く。

測ると37・8の数字。

すぐに薬を飲み、ソファにうずくまる。

○大学病院・診察室（朝）

鈴香、千葉から渡された検査結果を見る。

千葉「そろそろまた入院しようか。限りなくレベルⅣに近いⅢだよ。外出も控えてね」

鈴香「マスクしてもダメ……ですか？」

千葉「それを許可できる数字じゃないことは、もう分かってるよね」

鈴香、沈んだ顔。

窓の外は薄暗い雲が広がっている。

○住宅街（夕方）

鈴香と日高、マスクを着けて歩く。

今にも雨が降り出しそうな曇天。

日高「映画結構面白かったよな」

鈴香「……そうですね」

日高「鈴香？ どうし……あれ、雨だ」

日高が手のひらを空に向けると雨粒が
付く。

日高「走れる？」

鈴香「はい」

日高、鈴香に帽子を被せ、自分が着て
いた羽織を着せて一緒に走る。

○日高のマンション・リビング（夕方）

シャワーの音が聞こえる。

日高、タオルで髪の毛を拭きながらソ
ファに座る。

お風呂場の方を見て大きく深呼吸。

ドライヤーの音が聞こえてくる。

× × ×

日高もお風呂から上がり、鈴香の隣に
座る。

日高「何したい？ DVDもあるし、ゲーム

もあるけど」

鈴香「……大和さんとキスがしたいです」

日高、困った顔で固まる。

大和「いや、でも……」

日高、心配そうに鈴香を見る。

鈴香「最近すごく調子いいって先生が。だから……」

日高「……分かった」

日高、手を伸ばして鈴香の髪を耳にかけながら顔を近づける。

2人、ゆっくりとソファに沈む。

窓の外は雨が強まる。

○大学病院・診察室

千葉、険しい表情で検査結果を見る。

何か言いたげな表情。

鈴香「入院……ですよね」

千葉「そうだね」

○同・待合室

鈴香、椅子に座り日高とのトーク画面を開いてメッセージを送る。
へ鈴香…しばらく入院することになっちゃいました〜
既読はつかず、画面を消す。

○レコード会社・会議室

長方形のテーブルが2つ並んだ会議室。
難波とビタレメンバー4人が向かい合
って座る。

難波「わずか数日でPVは早くも1億回再生
突破。来週のMスタ生出演もねじ込んだか
らな」

難波、4人にタブレットで折れ線グラ
フを見せる。

ビタレ、目を丸くして覗き込む。

中村「(小声で)MスタってあのMスタだよ
な？ スタジオの名前じゃないよな？」

原「(小声で)どう考えてもあの音楽番組の方
だろ！」

難波「とりあえず来年は派手にライブやるぞ

〜！」

日高、机の下でガッツポーズをする。

○大学病院・個室（夜）

鈴香、ベッドに座ってテレビでMスタ
を見ている。

鈴香、ビタレが登場して小さく拍手。

飯田がマイクでコメントを言うてから

スタンバイ。

ビタレ、歌い始める。

鈴香の笑顔が次第に消えていき、テレ

ビの音も遠くなる。

鈴香、虚ろな目で画面を見つめる。

○日高のマンション・部屋の前

鈴香、日高の部屋のチャイムを鳴らす。

日高がドアを開ける。

日高「いらっしやい」

鈴香「これデザートです」

と、小さな白い箱を渡す。

日高「サンキュー」

○同・リビング

日高、マスクを着けて鈴香に近づき抱きしめる。

日高「年末年始バタつきそうだから、今のうちしかないと思って我儘言ったわ。体調は？ 大丈夫か？」

鈴香、日高の腕の中で頷きながら、

鈴香「はい！ 私も大和さん不足でしたもん」

日高「よし！ とりあえず飯にしよう！」

○同・キッチン

鈴香と大和、一緒に料理をする。

○同・リビング（夕方）

鈴香と日高、ソファで一緒に横になりながらまどろむ。

日高「あ、そうだ。渡したいもんあったんだ。

ちよつと動くぞ」

鈴香、日高と一緒に体を起こす。

日高が立ち上がると、鈴香が服の裾を掴んで引き止める。

日高「どうした？」

鈴香、俯いたまま。

日高、しゃがんで鈴香と目線を合わせる。
る。

鈴香「・・・たいです」

日高「ん？ ごめん、聞こえなかった」

鈴香「・・・もう、別れたいです」

日高、大きく目を見開く。

日高「(笑いながら)エイプリルフル先取り？ クリスマスもまだだぞ」

鈴香、真剣な眼差しで日高を見る。

日高、深呼吸する。

日高「・・・なんでそんな結論に辿り着いたのか、一応聞いてどうか？」

鈴香「・・・どんだん夢を叶えていく大和さんを見てると、虚しくなるんです。私とは違

うんだなって……だからもう、限界です」

日高、言葉に詰まる。

鈴香「……お邪魔しました」

鈴香、立ち上がり頭を下げて日高の横を
を通り過ぎる。

日高「鈴香、待ってっ！」

玄関からドアの閉まった音が聞こえる。

○同・作業部屋（夕方）

日高、重い足取りで部屋に入る。

デスクの上にはリボンが結ばれた小さな箱。

椅子に座り窓の外を見ると雪が降り出している。

日高、玄関へ走る。

○住宅街（夕方）

日高、粉雪が降る中傘を持って走る。

○駅前・広場（夕方）

会社や学校帰りの人が行き交う。

日高、改札前に鈴香が立っているのを見つける。

日高「鈴香！」

小林「鈴！」

日高が手を挙げて名前を呼ぶと、同時に別の所から小林の声が聞こえる。

鈴香、日高には気が付かない。

小林、傘を畳んで鈴香に近づく。

短い会話を交わし、改札の中に消えていく。

日高、2人の背中を見つめる。

○レコーディングスタジオ・中

飯田、ビタレのSNSアカウントを見る。

「ビタレ、武道館公演決定」の文字。

中村「なんか感慨深いよな。まさかこんな早くライブ決まるなんて」

中村と原が盛り上がる。

飯田、日高の方をチラッと見る。

飯田「……いいのか？ 鈴香ちゃんのこと」

日高「ちよつと距離置いた方がいいこともあるだろ」

と、暗い表情。

○空

青空に真っ白な入道雲。

蝉の鳴き声が響く。

○ラーメン屋・店内

小林、カウンターを布巾で拭いている。

扉がガラガラと開く。

小林「すいません、まだ開店前なんです……

あれくもしかして、ビタレの飯田さんですかあ？」

小林、大きさに反応する。

飯田、店内に入ってくる。

飯田「お前、イジってんだろ。せつかくお前の席取ったのに、いらなそうだな」

小林「え!? 席って、もしかして武道館ライブのですか!？」

飯田「ちゃんど関係者席確保させていただけきましたよ……だからさ、鈴香ちゃんにも声かけてもらえるか？」

小林「それは、はい……もちろんです」

小林と飯田、気まずそうに顔を見合わせる。

○鈴香のアパート・部屋の前（夕方）

小林、マスクを着けてお見舞いに来る。

小林「具合どう？」

鈴香「特に変わりなしだよ」

小林「そっか……そういえば、ビタレのこと知ってる？」

鈴香（頷く）もうすぐだよね武道館公演」

小林「達也さんが席用意してくれてるって。体調良かったら鈴も行こうよ。まだ少し時間あるし」

鈴香「え〜私その時まで生きてるかなあ？」

鈴香、ヘラヘラしながら言う。

小林「顔を歪めて」鈴……！」

鈴香「やだなあ冗談だって。そんな顔しないでよ」

× × ×

鈴香、ドアを閉めてしゃがみ込み、そのまま膝に顔を埋める。

○武道館・外観（夕方）

たくさんの方が集まっている。

○同・会場内（夕方）

鈴香と小林、前方の関係者席に案内される。鈴香、マスクを着けている。

小林、会場内を見渡す。

小林「すごい人だな」

鈴香「そうだね」

会場が暗くなり、ビタレがステージに出てくる。

鈴香が日高を見つめていると、日高も

鈴香を見つける。

見つめ合う2人。

鈴香が頷くと、日高が口角を上げる。

原のステイックの合図でライブが始まる。

会場は大盛況。

○同・楽屋（夜）

ビタレ4人が楽屋に戻る。

日高、鈴香にメッセージを送る。

へ大和…会いたい

既読はつかない。

○日高の新居・寝室（朝）

日高、鏡の前でアクセサリーをつけ、

サングラスをかけて準備をする。

○同・エレベーター内（朝）

25階から順に下がっていく。

○ 駅・階段（朝）

日高、地下鉄の階段を下りる。

○ 地下鉄・電車内（朝）

日高が座っていると妊婦が乗ってくる。

日高「ここどうぞ」

妊婦「ありがとうございます」

○ 並木道（朝）

枯葉が地面を歩く日高。

花屋の前で、小さなブーケが目に入り

足を止める。

※ ※ ※

（フラッシュ）

鈴香「大和さんがこれを買ってくれてるとこ

見たかったー！」

と、ブーケを持って笑う。

※ ※ ※

日高、迷わずブーケを手に取ってレジ
に持って行く。

○霊園（朝）

日高、「佐野家之墓」の前で止まり、
地面に座ってブーケを置く。

日高「俺の夢、順調に叶ってるぞ。なのに、
話がちげーじゃん」

日高、何かを思いついた顔をしてスマ
ホの録音画面を出してハミング。
秋晴れの空が広がる。

○コンサートホール・ステージ（夜）

ステージには歌のスタンバイをしたビ
タレの4人とタキシードを着た男性司
会者。

司会「今回、バンドとして初となるラブソ
ングで見事日本ミュージックアワード大賞に
輝きました。それではお聴きください、

Bitt@r Lemonで『サヨナラを歌う』

（了）